



1982年(昭和57年)
5月号(No. 443)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 彼我の違い 田口二郎(1)
山岳図書を読む集い 図書委員会(2)
吉沢一郎氏の「アメリカの山岳図書」の話し
海外の山では(2)
謝演会報告 自然保護委員会(4)
「山と鳥」 柳沢紀夫氏
第19回「この一本展」より(2) 図書委員会(5)
図書紹介(6)
「山と友」
山岳第76年について(土井高夫)とそのご批判に答えて
山岳編集委員会(6)
東西南北(7)
報告 青年懇談会, 北海道支部(8)
お知らせ(2), (8), (11)
科学研究委, 信濃支部, 山研運営委, 集會委, 総務財務委, 海外委
会務報告・ルーム日誌・会員移動(9), (11)
1981年発行会員名簿正誤表 1, 2
お知らせ(10), (11)
カット/吉阪, 宮下, 松本, 芳野

▶日本山岳会事務取扱時間

月, 火, 木, 土曜 10時~20時
水, 金曜 13時~20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

留守番電話(電話番号24-16659)

彼 我 の 違 い

田 口 二 郎

好きな歌に森繁が唄う「海の夜明け」というのがある。水平線に顔を出す朝の光が力強く広がる情景が唄われているのだが、締めくくりに森繁が「人間は何と小さいものなのだろう」と詠嘆すると私は年甲斐もなく心にわななきを覚えて心がいつしか海から山に飛翔して若い日々を思い出す。

書くまでもないことだが大昔から人間は大自然から素直な感動をうけてきた。万葉をもちだすまでもないことだ。多くの文化や行動の原動力になったこの感動は山登りの原点でもあったように思われる。これを引き金にしてどの時代の登山者もそれぞれの山岳像を心の中に画いてきた。

はひとまず横において岩や氷雪の高山を対象にしてみよう。その山肌は所詮無機の世界であって分断された表皮は科学の興味の対象になっても、再びそれを繋ぎ合わせた裸の山がそのままの姿で感動を呼ぶ保証はないはずであろう。それにもかかわらず私達は山を眺め無機なるその実体とはお構いなしに心の中に感動的な山岳像を創り出すのを常としてきた。かつて目にした山の姿を目のあたりにすることができるのはこの心的作業のお蔭であるし、時代時代の山がそれぞれの心的風景を生んできたのもまたそのせいである。

近代登山は英人のウェストン師が明治に日本にもちこんだものだが、日本の高山は遙かの昔に頂を踏まれていた。初登頂者である大昔の修験者や坊さんの目に槍ヶ岳や剣がどう映ったのか大変興味のあつたものであつたに相違ない。その心象は今日のそれとは随分ちがったものであつたに相違ない。しかし私が驚くのはそんな大昔の人達のことではなくて、私達と半世紀も隔たっていない現代の第一線の登山家達が、私達と何と違つた視線で山を見ているか、についてである。

ていて、山登りを終えて山をふり返る時には、それは以前にもまして幻想的に見えたものだ。昭和ひとけた時代に大当たりをとったウ



ツェルマットの Café dupont にて・吉阪隆正

今の人と同じように、私達も山や壁を睨んで山肌に登路探索の目を投げた。しかし私達の時代には山は登れるかどうか、実際にとりついてみないと分からない、という厳然とした公理が存在していたものだ。そしてこの公理を中において、山と私達との間には聖なる心の距離がいつも保たれていた。この聖なる距離こそが考えてみると、私

山をきれいに「三」は持ち帰るつ

達のロマンチズムの源泉であつたように思われる。

しかし今はちがう。巨峰がすべて登られてしまったばかりではない。冬に無酸素で巨峰に登り、また多くの残されたヒマラヤなどの壁を手がけるのが現代登山最大の課題であるのだが、今日の先端技術と科学的訓練は、登山の世界から不可能という概念を追い払ってしまった。

果たして登れるのか、とかかつて登山者を夢幻に誘った幻想のヴェールは完全に引き剥がされ、山は

山岳図書を語る集い

愛情と好奇心と批判の読書

吉澤一郎氏の「アメリカの山岳図書」の話

図書委員会



スケッチ・宮下啓三

「こういう年寄りを、こういう場所に引っぱり出すのは、けしからん」という言葉で話が始まった。こういう年寄りとは、一九〇

い。そうはいっても若い人は山へ行く時間が必要なのだから、これは老人の役割だ。分業もやむをえない。怒ってばかりもいられない

今や冷たい裸身を若い登山者達の非情な目のまえに曝している。その容赦ない目が壁の登路探索にむけられる時、山は頂から基底まで水平に、チクワのように何十段も輪切りにされて、ブロックごとに、その登攀に必要な労働力・資材の冷静な数値計算の対象とされる。一時代まえの人達から些か詩的な視線でもって眺められた山は、今や恰も建築家が高層建築を構想する時に似た、工務的な眼差しで凝視されるようになった。

三年生まれの吉澤一郎氏。名誉会員、元副会長、K2隊の総指揮者、そして海外連絡委員会では現役として指導的な役割を演じている。こういう場所とは、日本山岳会のルーム。けっして吉澤氏に不似合いな場所ではない。「若い人がたくさんいるのだから、もっと勉強してくれないといけない

海外の山では

インドとパキスタンは今シーズンからの登山規約の改正を申し入れている。改正内容の主なもの登山料金であるが、インド登山財団(IMF)は料金アップを、パキスタンはダウンを打ち出しており、両国の事情の違いを示した。

IMFの料金アップ細目は、①ナンダデビ東西両峰①一五、〇〇〇ルピー②同峰を除くナンダデビ山域①一〇、〇〇〇ルピー③標高二一、〇〇〇ルピー以上④二七、五〇〇ルピー⑤ヘリコプター救出に要する費用は、飛行一回につき二五、〇〇〇ルピー(場合によってはそれ以上)。

登山料のアップは、既報のように、インド・ヒマラヤでの遭難多発を考慮、従来支弁していたIMFの、地元山岳協会、警察への捜査、救助活動の諸経費負担を見込み加算したものとと思われる。諸物価高騰はここでも否めまい。

一方、パキスタン側の新登山料金を紹介する。①K2②三〇、〇〇〇ルピー②八〇〇〇ルピー(K2を除く)③二〇、〇〇〇ルピー④七、五〇〇ルピー⑤八、〇〇〇ルピー⑥一五、〇〇〇ルピー⑦四七、〇〇〇ルピー⑧一五、〇〇〇ルピー⑨四七、〇〇〇ルピー⑩一五、〇〇〇ルピー⑪二、〇〇〇ルピー⑫六、〇〇〇ルピー⑬七、〇〇〇ルピー⑭七、〇〇〇ルピー⑮七、〇〇〇ルピー⑯七、〇〇〇ルピー⑰七、〇〇〇ルピー⑱七、〇〇〇ルピー⑲七、〇〇〇ルピー⑳七、〇〇〇ルピー㉑七、〇〇〇ルピー㉒七、〇〇〇ルピー㉓七、〇〇〇ルピー㉔七、〇〇〇ルピー㉕七、〇〇〇ルピー㉖七、〇〇〇ルピー㉗七、〇〇〇ルピー㉘七、〇〇〇ルピー㉙七、〇〇〇ルピー㉚七、〇〇〇ルピー㉛七、〇〇〇ルピー㉜七、〇〇〇ルピー㉝七、〇〇〇ルピー㉞七、〇〇〇ルピー㉟七、〇〇〇ルピー㊱七、〇〇〇ルピー㊲七、〇〇〇ルピー㊳七、〇〇〇ルピー㊴七、〇〇〇ルピー㊵七、〇〇〇ルピー㊶七、〇〇〇ルピー㊷七、〇〇〇ルピー㊸七、〇〇〇ルピー㊹七、〇〇〇ルピー㊺七、〇〇〇ルピー㊻七、〇〇〇ルピー㊼七、〇〇〇ルピー㊽七、〇〇〇ルピー㊾七、〇〇〇ルピー㊿七、〇〇〇ルピー

〇〇〇ルピー①七、五〇〇ルピー②二、〇〇〇ルピー③六、〇〇〇ルピー④七、〇〇〇ルピー⑤七、〇〇〇ルピー⑥七、〇〇〇ルピー⑦七、〇〇〇ルピー⑧七、〇〇〇ルピー⑨七、〇〇〇ルピー⑩七、〇〇〇ルピー⑪七、〇〇〇ルピー⑫七、〇〇〇ルピー⑬七、〇〇〇ルピー⑭七、〇〇〇ルピー⑮七、〇〇〇ルピー⑯七、〇〇〇ルピー⑰七、〇〇〇ルピー⑱七、〇〇〇ルピー⑲七、〇〇〇ルピー⑳七、〇〇〇ルピー㉑七、〇〇〇ルピー㉒七、〇〇〇ルピー㉓七、〇〇〇ルピー㉔七、〇〇〇ルピー㉕七、〇〇〇ルピー㉖七、〇〇〇ルピー㉗七、〇〇〇ルピー㉘七、〇〇〇ルピー㉙七、〇〇〇ルピー㉚七、〇〇〇ルピー㉛七、〇〇〇ルピー㉜七、〇〇〇ルピー㉝七、〇〇〇ルピー㉞七、〇〇〇ルピー㉟七、〇〇〇ルピー㊱七、〇〇〇ルピー㊲七、〇〇〇ルピー㊳七、〇〇〇ルピー㊴七、〇〇〇ルピー㊵七、〇〇〇ルピー㊶七、〇〇〇ルピー㊷七、〇〇〇ルピー㊸七、〇〇〇ルピー㊹七、〇〇〇ルピー㊺七、〇〇〇ルピー㊻七、〇〇〇ルピー㊼七、〇〇〇ルピー㊽七、〇〇〇ルピー㊾七、〇〇〇ルピー㊿七、〇〇〇ルピー

(片山全平)

科学研究委員会からのお知らせ

「大いに語ろう ヒマラヤの自然」

シン・ボジウム

一、日時 昭和五十七年七月四日(日) 十時～十七時

二、場所 名古屋大学水圏科学研究所大講義室

名古屋駅より地下鉄東山線東山公園下車徒歩15分

一、プログラム

〔午前の部〕 十時～十二時

○挨拶

(10分) 樋口 敬二(名大)

JAC オリジナル
Tシャツ販売のお知らせ

昨年大好評のJACマーク入りTシャツを、今年も準備しました。綿の素材を上質にしたもの、ポケット付で

い

二月二十日。土曜日の午後とあって、飛び入り歓迎の談話の会である土曜会が別室で開かれていてそこには仙台から九十一歳の平澤亀一郎氏をはじめ、め八十歳台の会員が五、六名見えていた。その方々の若々しさを見ると、日本山岳会における年寄りの定義とは何なのだろうか、と首をひねらずにはいられない。

この日、これまで年末の晩餐会に併設されてきた「この一本展」がはじめて図書室で催された。図書委員会主催の定例行事「山岳図書をかたる夕べ」も、今回はじめて夕方には間のある、早い午後につづされた。はじめてのことが二つ重なったが、図書好きの人たちにとっては大いに有難いことであった。ひとつだけ心残りなのは、暖い東京の冬が雨を降らせてしまったことである。これが雪であって、暖炉をかこんで山岳図書の話を聞けるのであったなら、どんなにかろうか。でも、「こんな場所」であるルームに暖炉はなく、柔らかなソファもない。しかし、参会者たちにしてみれば、吉澤氏の話は貴重な炉辺談話であった。「アメリカの山岳書」の題名に語呂を合わせた雨が降ったのかも知れない。三十名近い出席者たちはいずれも山岳図書への関心にかけて劣りはしない。吉澤氏が持参した二十数点の書物に目をそそぐ。

「私がアメリカの本で一番大事にしていたのは、ベイツやハウストンらによる『ファイブ・マイルズ・ハイ(高度五マイル)』で、一九四〇年の出版。戦時中に手に入れたのが紛失してしまっていた。インドのボンベイで見つかったと思われるこの本が、つい先日ロンドンの古書店から届いた。やっこの思いで昔の本にめぐりあえてうれしがっている」

本との出会い、再会の喜びは、近く来日する原著者の一人との面会の楽しみに通じる。次の「ヒストリー・オブ・シエラ・ネバダ(ネバダ山脈史)」も、著者の家庭でもてなしの追憶がともなう。スタンフォード大学の歴史学名誉教授であるパークハルは、アラスカ、カスケード、ロッキーなどの歴史を多く書いた人物で、吉澤氏と同年齢。一九六六年に立ち寄ったとき、自分で車を運転して迎えてくれた。およそ登山家が、そして歴史を研究する者がつべき本はほとんどすべて所有しているのには感嘆した。二階の部屋に泊まったが、枕もとに北米のいくつかの山地の地図が用意されており「お持ち帰り下さい」といわれ、日本では体験できないものなしの篤さに感動した。土産としてもらったアラスカの二五〇万分の一図は今もって重宝している。このようにかたり進める吉澤氏が紹介した書物のすべてについて

○ヒマラヤ山脈の気候について
○ヒマラヤの気象予報

(30分) 井上 治郎(京大)
(40分) 中島暢太郎(京大)

○デイスカッション
コメント

(40分) 渡辺 兵力(日大)
(40分) 中村 純二(東大)座長

冬のヒマラヤ

池上 宏一(名大)

ヤルンカン

上田 豊(山口大)

ヒマラヤの気象

中川 和道(東大)

モンズーン・降雪・気象など

他登山家

〔昼食を兼ね懇親会〕 十二時〜十三時
〔午後の部〕 十三時〜十七時

○ヒマラヤ・チベットの生物地理
○ヒマラヤ・チベットの地学

(40分) 和田 一雄(京大)
(40分) 伏見 碩二(琵琶湖研)

休憩

○寒冷圏としてのヒマラヤの自然と登山

(20分) 藤井 理行(極地研)

永久凍土

(20分) 横山宏太郎(武蔵川女子大)

氷河地形

(20分) 上田 豊(山口大)

氷河

(80分) 渡辺 興亜(名大)座長

○デイスカッション
コメント

氷河地形

小野 有五(筑波大)

氷河作用

岩田 修二(東京都立大)

デブリ・カパー・氷河

吉田 稔(名大)

雪崩・クレバス・ヒマラヤ襲撃など

他登山家

主催 日本山岳会科学研究所委員会

協賛 比較氷河研究会・ヒマラヤの自然史を語る会

日本山岳会東海支部・名古屋大学水圏科学研究所

一、参加費 二千元(予稿集・昼食代)

一、定員 六十名

一、申込先 JAC 科学研究所委員会 中村純二(電) 〇三一四六七一一七 内三〇八

または名古屋大学水圏科学研究所 渡辺興亜(電) 〇五二一七八一一一五一一 内五七二八

まで

◎七月三日夜、名古屋に宿泊希望の方は名古屋大学職員会館

一泊千五百円(食事なし)が予約可能。科研委中村まで

一、申込期限 昭和五十七年六月十五日

ワンポイントのマークをデザインしたもの、の二種類です。今回も配布数に限りがありますので、早めに事務局までお申し込み下さい。

販売価格

(A)ポケット付Tシャツ

(B)上質綿(天竺)使用

Tシャツ(左に縦で

英文山岳会名入り)

色 白のみ

サイズ S、M、L

の三種類

なお、郵送希望者は、

一枚で二五〇円、二枚

で三五〇円の郵送料金

を添えて現金引換えに

てお申し込み下さい。

総務財務委員会

報告することは、残念ながらあきらめなければならぬ。しかし、氏が蔵書家、愛書家であるだけでなしに、愛読家であり、ときには批判的読者であることを、参会者だけの認識にとどめておくべきではない。

たとえば、ソリーントンの『グリラリグ・マウンテンズ・オブ・カナダ(カナダの輝ける山々)』を吉澤氏は「ロッキー山脈に關してもっとも貴重なものの一つ」と評価する。同じ筆者によるブリティッシュ・コロンビアのガイドブックの一冊には、一九〇一年にウインパーが北米であちこち登ったということの疑わしさが指摘されていることを氏は見のがさない。ビューラーの「ルーフ・オブ・ザ・ロッキーズ(ロッキーの屋根)」も、吉澤氏は「とてもいい信用のできる本」と呼ぶ。

一方、活字を盲信することの弊害を氏はきびしく指摘する。リッジウェイ編の『ザ・ラスト・アセント(最後の登行)』はK2登頂のアメリカ隊の報告書だが、序文と本文とは遠征に参加した隊員数がちがって書かれている。先述のソリーントンのガイドブックでも本文でピークとあるのが索引でマウンテンとあり、山の呼称に不一致をきたしている。ついでにえば、メスナーの本には「アメリカと日本は国威発揚のために登った」とあるので、メスナーに文

句をいってやりたいと思う。当の日本でもセント・ヘレンズ火山の爆発の報道で新聞その他はすべてちがった標高を載せていた。なおこの爆発についての正式報告は『アメリカン・アルパイン・ジャーナル一九八一』に出ている。

この種の批判は出版社そのものにも向けられる。「コリンズ・ガイド・オブ・マウンテンズ(コリンズ山岳案内)」はイギリスで出た世界山岳についての本で、それ自体は便利で有益である。のちにアメリカで出た「ワールド・ガイド・オブ・マウンテンズ」を注文してとりよせたら、ちがうのは題名だけで内容はそっくりそのまま。四千円の損をした。

このようにかたがてから吉澤氏は最後に一冊の日本語の書物を私たちに示した。ロス著「ホーン岬への航海」で、十年前の出版物をつい最近本屋で見かけて買ったのだが、ヨットによる旅行の記録としてとても面白い。写真と地図がきわめて適切に配置され、造船学の専門家である訳者(野本謙作)の訳や注もよい。手本にすべき本である(海文堂刊)。かくして氏の目配りは海の本に及んで、山岳図書のあるべき姿を暗示したところで結びとなった。

氏の蔵書の随所に引かれた赤線が、愛情と知的探究心と批判精神をあわせもつ読書好きの山岳人の面目をものがたっていた。吉澤氏

講演会報告

自然保護委員会

〔昭和五十七年一月二十二日(金)午後六時三十分〜八時三十分 ルームにて〕

山と鳥

日本鳥類保護連盟

指導部長

柳沢 紀 夫氏

◇「鳥」とはどのような動物か

鳥は、

○体の内部に骨格をもっている。

○体は羽毛に包まれている。

○翼をもっていて、空を飛ぶ。

○体温は一定の温度に保たれている。

○繁殖は卵による。

といった条件を満足しているものと言えよう。すなわち「飛ぶ」ということに極めてすぐれた適応をしてきた動物であり、全身を包んでいる羽毛は軽量で保温性にとみ丈夫である。骨格も飛行に適した形になっている上、空洞があり、軽量化が図られている。こんなわけで、海岸、つまり標高〇米の場所から、六千米のアンデスや八千米のヒマラヤを越すという程の上空へも一息に舞い上がる事ができる。また食べた物を消化する力が強く、すぐにフンにして体外に出す。これも軽量化への適応である。

◇鳥は八六〇〇種

地球上に鳥の棲んでいる場所は、南極大陸の中央部だけである。つまり人の住んでいない場所はある。鳥の棲んでいないところはない、といつてよい。

その鳥は世界中で八六〇〇種程が知られている。植物が約五十万種、昆虫が約七十五万種といわれているのに比べると、とても少ない。これは

植物だけが太陽エネルギーを使っているのを作り出すことが出来、植物の作り出したものを昆虫が食べ、その昆虫を鳥が食べ、そして鳥が死んで生きているからであって、より生態的に高位にある所の種類は限定されてくるのである。

日本では五〇〇種余りが記録されている。北半球の温帯に位置していることを考えると決して少なくはない。これは寒帯から亜熱帯まで気候的な幅があること、海、山、谷、川、林、草地、池沼など環境の変化が大きいことなどによる。

◇鳥は環境の動物

鳥はその種毎に棲む環境を選んで棲んでいる。同一環境に同一条件の二種がいたのでは競争になり、どちらかが競争に敗け亡んでしまう。亡びぬためには他の種と競合しない自分だけのテリトリイをもつ必要がある。岩山に棲むものは森林には棲まないし、針葉樹林ばかりを選んで暮らす鳥もいる。このためある地点にいる何種かの鳥を調べることによって、その地点の自然環境を描き出すことができる。見方をかえれば、鳥は自然環境のモニターの役割をもっているといえる。鳥がいなくなるとするのは、その鳥が暮らすことのできる自然環境の消滅を意味しているのである。

◇鳥類保護は自然保護 Arrow-head

世界でも、日本でも、自然保護運動の最初の引き金は鳥の関係者が引いて来た。Bird watchingは鳥を見ること、研究することを楽しみとしているが、その際鳥だけを見ているのではなく、どんな環境に棲んでいるのかを一緒に見ており、その環境が失われてしまえば鳥も失ってしまうことを知っていた。すなわち鳥のいる場所の大切さを知り、何とか残せないものかとの運動が進められることになったのである。

◇Bird watching とは

バードウォッチングは鳥を通して自然とのつな

の若々しさの秘密でもある。そして私たち「若い人」は氏の刺激をひととお貴重なものと感じた。

来会者・順不同 島田 巽、滝川清、宮下啓三、平井吉夫、神原忠夫、小川益男、織内信彦、望月達夫、加藤 隆、村松紀夫、木村義昌、菅野弘章、澤 英武、近藤信

第十九回

「この一本展」より

(2)



カット・松本慎太郎

五、白瀬中尉伝記

日本極地研究会編

昭和十五年三月

三七頁 十五部限定

北洋から南極へと大きな足跡を残した白瀬中尉に心酔傾倒する若き学徒(当時)木村善昌、谷口善也の阿氏が中心となり、私的な集まりである日本極地研究会ができたのは、昭和八年ころのことではなかったかと思う。

阿氏は共に拓殖大学出身の熱心な極地研究者である。

本書は木村、谷口阿氏が、白瀬中尉の幼少時代から北千島占守島の越冬、南極探検、そして不遇のうちを送る晩年の生活までを、老中尉から直接ヒアリングを行い、蒐集した内外の文献や中尉所蔵の

行、織田沢美知子、土井高夫、神戸恵子、雁部貞夫、近藤保人、三栖寿生、大島輝夫、小林浩一、山崎安治、泉久恵、中川恵資、筒井稔、野口末延、北島光子、石川治郎、河野悠二、松家晋

(宮下啓三)

資料類を参照してまとめたものである。老年の中尉に対して阿氏が

行った質問は、数年間継続し、数千項目に及んだと書かれている。

一九三三年、英国のデオグラフィカル・ジャーナル十一月号に、

日本南極探検隊についての紹介記事を発表している親日的ノルウェー人イワル・ハムレ氏が本書のためにはるばる序文を寄せているのが眼をひく。

「白瀬中尉伝記」は、中尉が健在中に眼を通してもらい、助言も受けているので、伝記としてはきわめて確度の高いものと思う。惜しむらくは限定十五部ということだ。今日所蔵している人は少いだろう。

私は、戦前、木村、谷口阿氏と文通したことがあった。お眼にかかる機会はなかったような気がする。

がりを求める行為であり、その際、鳥と人とは同じ立場に必要がある。狩猟、捕獲、飼育といった人の意志の一方的押しつけであってはいらない。自然の中の鳥の生活の一部を見てもいい。聞かせてもらい、それを楽しむことなのである。だから鳥の生活をおびやかさないように配慮する必要がある。このとき鳥も彼等本来の姿に戻って自然の中にひたりきり、互いに楽しい時間をもつことが可能になるわけである。

いことによる。これらのため自然界での鳥の役割りは正しく伝えられていないからである。野鳥保護運動の最大の目標は、幼児期に鳥の正しい知識による教育がしっかりとされることである。これは人類の将来を安全なものにし、自然を大切に

るが、貴重な一冊の領受を受け、

爾来愛蔵していたものである。

織内信彦

六、大秘密国・西蔵探検

河口慧海述

林久寿男編

明治三十六年

又聞精華堂刊

「大秘密国・西蔵探検」は珍しいもので、古本屋などあちこち歩き巡っても見つけ出すのは容易なことではなく、川崎のある本屋で探し出すことができたが、値段を見てびっくり、高すぎて手が出せず、時折見に行っていたが、売れたのであろうか、書店から消えていた。

買いそこない、あきらめていたところ、友人が安い値で譲るとのこと、手に入れたのがこの本で

ある。

なにしろ珍しい本で知らないし、見たこともない人が多いと思うので、この「一本展」に出品しました。

加藤 隆

七、「Kamet Conquered」

by F.S. Smythe.

London, Victor Gollancz, 1932

(C.J. Morris 宛蔵呈本 著者

スマイス署名、旧蔵者モリス署名及び蔵書票付き)

"The Kanchenjunga

Adventure"

by F.S. Smythe.

London, Victor Gollancz, 1930

(著者スマイスの署名、旧蔵者

モリスの蔵書票付き)

二冊ともスマイスの著作だから、本自体珍しいものではなく、本に興味のある会員諸氏はすでに

お持ちのことだろう。珍しいのは、

この本が二冊ともカラコルムやネパールに永く経験があり、特にパトゥーラ氷河群のすばらしい地図(G・J一九二八年六月号)を作ったC・J・モリスの旧蔵書であることだ。二つともF・スマイス

からの献呈本である「カメット登山」の方には、モリスの自署も並んでいる。

もう一つ、私を喜ばせたのは、モリスのきれいな蔵書票が貼りつけてあったことだ。グルカ兵がヒマラヤを背景に立っているデザインは、いかにもヒマラヤ本を飾るにふさわしいではないか。彼は第三グルカ・ライフル連隊の将校として、ネパールで何年間か暮らしている。後年になって、「A Winter in Nepal」(一九六四)を著したのも、ヒマラヤやグルカ兵に対する愛情の表われであろう。

スマイスがこの二冊の著書をも

リスに献呈したところは、エヴェレスト登山が盛んに試みられ、二人とも隊員として参加している。エヴェレストの先輩としてのモリスに、スマイスはこれらの本を捧げたのだらう。モリスは一八九五年生れ、スマイスは一九〇〇年生れである。一九三六年この二人は、ラトレッジの率いるエヴェレスト登山隊隊員として同行している。

迫り来る世界大戦を前にして、二人は何を語りあったのだろうか。

モリスは、一九三四年に軍籍をはなれ、一九三八―四二年まで滞日し、その間に慶応大学の英文学教授として教鞭をとった。日本の山岳界関係者との交流はどの程度あったのか。時代の流れは、のどかにヒマラヤを語り合うことなど許さなかったのかも知れない。モリスのその頃の著書『東京より帰って』(Traveler from Tokyo、一九四三)は、戦時下の日本人の生活を伝えて興味深い。この本のカバーには第二次大戦々時下の、日本の新聞広告が印刷されていて面白いが、すでに山とは関係のない世界なのでこの辺で筆をおこう。

モリスは、一九三四年に軍籍をはなれ、一九三八―四二年まで滞日し、その間に慶応大学の英文学教授として教鞭をとった。日本の山岳界関係者との交流はどの程度あったのか。時代の流れは、のどかにヒマラヤを語り合うことなど許さなかったのかも知れない。モリスのその頃の著書『東京より帰って』(Traveler from Tokyo、一九四三)は、戦時下の日本人の生活を伝えて興味深い。この本のカバーには第二次大戦々時下の、日本の新聞広告が印刷されていて面白いが、すでに山とは関係のない世界なのでこの辺で筆をおこう。

八、空と樹木

雁部貞夫

尾崎喜八著
大正十一年刊

文芸社

著者の処女詩集である。当時著者は東京郊外に住み、自然を愛していたが、山に無縁だったから、本書の内容は岳人にはやや物足りない。大正十三年刊『高層雲の下』、昭和二年刊『暁野の火』も同様で、前回出品した田中冬二処女詩集『青い夜道』が山村風物詩なのとは、だいぶ異なる。

ところが数年後、著者は河田積氏と相識し、その案内で山へ行くようになり、かつげんと山への眼が開ける。以後、魚が水を得たように次々と傑出した詩文を発表し、昭和八年に詩集『旅と滞在』を刊行する。著者の天分發揮の方向を決定づけた意味で、河田氏の存在は貴重だった。(『山の絵本』は、河田氏にささげられている)

それ以前を回想して、著者が私に語ったことがある。「以前はやら力んだものだ」と。

本書見返し

空と樹木、

それこそ私のまことの富であった日

今にしてなつかしむ

尾崎喜八

は、戦前に書いて頂いたもの。本書の装丁は天金、表紙はブルーの地色に金色文字で、表はフランス語、背は日本語の書名。ゼいたくで、しゃれているが、当時の著者の傾向を感じさせる。

川崎精雄

図書



紹介

山と友

東大山の会編

戦前からの大学山岳部、旧制高校山岳部の部報の主要記事を一冊にまとめたものとしては、早大山岳部の『リュックサック・早稲田の山』(昭和三十四年)、甲南大『時報』(昭和三十九年)、静岡大山岳部『紫岳』(昭和五十二年)、

・「山岳」第七十六年に
ついて

土井高夫

「山岳」第七十六年を読んだ。編集委員諸氏のご努力に、まず感謝申し上げる。ここでは、気になった点を二、三、述べさせていただきます。ただし、内容の方向性云々の問題ではなく、形式的な面についてである。

第一は誤植。会報四四〇号で編集委員会がすでに一部述べておられるが、少し多いのではないだろうか。誤植は出来上りの品格に大いに影響するから、軽視すべきではない。A Jを見

山形大山岳部「コーボルト」(昭和五十三年)、北大山岳部「五十周年記念号」(昭和五十四年)などあり、それぞれ現在ではおいてそれと読めない貴重な記録が再録されていて読みごたえがある。

今回東大スキー山岳部のOB会である東大山の会より、五十周年記念誌として発行された「山と友」も、東大スキー山岳部の半世紀におよぶ足跡が克明にトレースされており、山岳文獻として後世に残る業績として評価したい。

戦前からの大学山岳部の部報としては慶大の「登高行」、あるいは北大の「部報」など充実したもののが確実に発行されていたが、東大スキー山岳部の「部報」は部内報

でも、最近だとたとえば地域ノート欄の日本人名など、間違いが目立ち失望させられる。時間の制約は厳しいだろうが、刊行が多少遅れることも、時には構わないのではなかろうか、私としても、もしお役に立てるものなら、校正のお手伝いくらいは、喜んでさせて戴きたいと思っている。

第二に英文の梗概。単なる付録でないとすれば、もう少し丁寧に作りたい。写真の英文説明も同様。

第三点は、或いは趣味の問題かも知れないが、記事、とくに登攀記録の中に、表現の形式の点で、何か調子の揃わないものが見受け

として出されており、部外者には見る機会が少なかった。不定期的なものではあったが、しかしその内容はきわめて優れたもので、登山史上からいっても欠かせない記録が数多く含まれていた。また東大スキー山岳部がいつ誕生したのか、これまで明確にされていないのだったのだが、こうした要望をこの書物はすべて答えてくれる。

「小史」、「山行記録より」、「海外遠征」、「遭難」、「随想」、「海外遠征に参加して」、「追悼」、「登山年表」の八章に分け一九二三年の発足から現在に至るその活躍の跡がまとめられている。

欲をいえば、昭和十年、十一年の「カクネ里合宿と白馬南股合

られることである。山岳の記事をしゃちこばって書く必要は少しもないが、会の年報としての性格から、一般向けの書物とは異なった、あるていど標準化された書き方が、自ずからあるのではなかろうか。とくに登攀の記録は、その記録性に第一の意義があるのだから、書くべき内容とその表現をよく選んで、限られた紙面に、有用な情報をなるべく多く盛りこむべきものと考えてみる。

以前の「山岳」にあった「投稿の規程」が載らなくなったのには、充分な理由があるのだろう。しかし「山岳」の編集は、



信濃支部、明治生れ隊の
ヒマラヤ・トレッキング

百瀬一茂
私たちは、隊長 宮原利重(七三歳)、会計 中村喜美(七二歳)、記録 百瀬一茂(七一歳)、渉外 田中仲治(七〇歳)と、明治生れの者だけでヒマラヤ・トレッキングに行ってきた。私たち四名は、かねてより明治生れの者のみでヒマラヤの山々をこの目で見てい、と思っていました。

最初エベレストコースを予定しましたが、強風のためルクラへ着陸できず、一時間十五分もヒマラヤの上空を飛び、心ゆくまで山々を眺めることが出来ました。

次の日はボカラへ出ました。毎日晴天に恵まれ、アンナプルナ、マチャプチャレ等を眺めることが出来ました。十数年前、アン

「宿」あるいは昭和十七年の「厳冬の燕槍縦走」などは全文を収めてもらいたかったし、一九三二年の「報告」などからも主要な穂高、剣の初登記録をひろっておいとほしかった。また追悼では故人の生没年だけでも付記してあれ

ば、と思った。
造本も立派で、精興社で印刷されたものといえ十分であろう。昭和五十六年十月十五日、東大山の会発行、四三七ページ、非売品、JACルームで販売して

(山崎安治)

ナプルで亡くなった、わが信濃支部員四名、シエルパ一名のご冥福を心よりお祈り致しました。現地人の貧しさと、日本での有り余る程の物資とくらべ、感慨ひとしをでした。

第十一回九山忌俳句大会

山下久男

故深田久弥氏が、その故郷、加賀市大聖寺にのこされたものに、加賀山岳会とはつしほ句会がある。氏の没後、指導を受けた句会員が氏をしのぶ句会を毎年催している。

今年三月十三日「ホトトギス」の主宰者、稲畑汀子さんらを招いて、第十一回九山忌俳句大会を、大聖寺町の本善寺で開いた。

伊藤柏翠氏ら八十一名が参加された。句会に先立ち、江沼神社境内の深田久弥文学碑前で、参加者一同の献花があり、つづいて深田さんの母校の錦城小学校の児童によって、「日本百名山」の一節が朗読され、更に筆者が「九山について」の思い出を語った。当日詠まれた汀子、柏翠、その、各氏の

本来、あの規定に表現されていたような権限を委ねられて携わるべき、重要で大変な仕事だと思ふ。

言うは易く、行ふは難いことを重々承知の上で、敢えておこがましいことを言わせて戴いた。

・「山岳」第七十六年に
対するご批判に答えて

山岳編集委員会

土井高夫氏の「山岳」第七十六年に対するご批判については全く指摘されたように正しい。ひとつ、ひとつそのとおりすべきことである。反論しようもない。そういう意味では、新しい指摘ではなく、編集者がいつも心掛けていくことである。その不十分さは編集者自身がかつとも良く知っている。それでここでは編集の事情をいささか説明させていただきたい。もっとも、事情説明したからといって編集者の責任がまぬがれられるものではない。ただ、編集者はつねに交替するものであり、批判された場合でも任期は二年で切れる。だから、多くの会員が自分のこととして考えねばならない。

第一点の誤植。これはいつも問題になる点であり、これまでにも幾度となく論じられてき

た。「山岳」の編集にたずさわるまでは、土井氏のように何故に誤植が多いのかとふしぎであって、三校もすれば誤植など解消すると感じていた。しかし、実際には、校正は一つの技術であって、また集中的に時間をとる仕事である。印刷所から送られてくるゲラ刷を見て、じつは編集者はほっとしているのである。原稿集め、内容の点検、割り付けなどが終わったことを意味するからだ。校正は大仕事の始まりで、編集の仕事は半分も終わっていない。校正の段階で気が付くことが多く、朱筆がいっぱいに入れられる。分担して内容点検した場合にはその不統一も校正の段階で訂正されることが多いし、時間の制約、編者の決断の悪さからどうにもならないこともある。校正のお手伝い、分担も理論的には良いが、土井氏一人にお任せもできないし、最終的には誰かがまとめねばならない。

どうしたら誤植を無くせるか。編集者が努力するしかないが、技術不足、時間不足をどう解消するか。筆者にはどうにもいい案が浮かばない。

第二点の英文の梗概。これは編集者が書き手に注文をつけて書かせればよいのだが、実際にはそうしていただくとまるとるのかわからない状態と思う。日本文についても同様で、これは第三点にも関

わるが、編集者の訂正などは、テニオハのことぐらいいで、その書かれていた内容について知らない編集者が文体を変えることなどできないし、これは会員の努力にまっしかなないと考えるが、どうであろうか。

「投稿の規程」に関しての土井氏の意見もまさにそのとおりで、「あの規程に表現されていたような権限を委ねられて携わるべき、重要な仕事」である。編集はたいへん重要で困難な仕事である。土井氏のいわれた形式的な面ばかりでなく、内容についても考慮せねばならない。広告の募集についても飛び廻らねばならない。

「山岳」第七十六年について特に土井氏が批判されたのは、あまりにもひどかったからかもしれないが、いいわけをさせてもらうなら、第七十六年は時間不足の中ではよくやれたと編集者自身は自分を慰めている。くどくどというのはさし控えるが、あわただしい中で多くの不満はあり、出来ない点はご了承していただきたいと思う。そして、これ以降も多くの編集者が交替して苦勞されるだろうが、あたたい気持ちで見守っていただきたいし、自分のこととして解決の方法を考えていただきたい。

(文責・水野)

句は次の通りであった。

残雪の嶺々となりつゝ北陸路

越前の水仙も亦由縁あり 稲畑汀子

報告

遠見尾根

五竜岳

山行



カット・芳野満彦

青年懇談会

三月二十日から三月二十二日にかけて、遠見尾根から五竜岳山行を、法政大学山岳部の現役、OB諸兄の協力、参加を得て行った。

二十日早朝、神城の旅館で法政のOB諸兄と合流し、テレキャビンに乗り法政小屋へ行く。小屋で五竜パーティと、スキーパーティに分かれ、五竜パーティ柳沢リダー以下七名は、ブリザードの中を大遠見まで行き、二時間余りかけて、七名が楽に入れる雪洞を掘る。夕食は、勝山会員の奥さんに作ってもらったベミカンにより、簡単にカレーができる。焼酎と濁り酒で雪洞の一夜を過ごす。

翌二十一日、風はほとんど無いが、小雪がちらつく中を、五竜岳アタックと決めた出発する。三月にしては気温は高く、雪は大変湿っており、雨具を通して服を濡らす。

全員びしょりと濡れながらも、無事五竜岳に登頂。記念撮影を終え、雪洞目指して駆け下る。

伊藤柏翠
春風に生涯歩みたる人を
安原その

雪洞のデボ回収後、法政小屋に帰還。高橋名コックや法政OB諸兄の手厚いもてなしを受ける。夜は酒が不足しながらも、ごうごうと音を立てて燃えるストーブの周りで、遅くまで語り合う。

二十二日は、遠見に来て初めて後立山連峰を眺めることができた。名残りを惜しみつつ、白銀の岳々を背にし、東京に向かった。参加者 宮寺忠夫、美穂、高橋聡、柳沢 宏、三沢幸夫、須沢広則、高平正樹、上総紀久男、梅本実、森下正一、山内真行、勝山康雄、比佐江、晋、悟、高沢朋之、岡村博克、板倉健二

支部だより

北海道支部

北海道支部恒例のスキーパスは三月十四日(日)札幌八時十分発ニセコチセハウスに十一時到着、お馴染みチセの主、織笠殿さんの出迎えをうける。参加者は、大塚支部長以下、会員、家族、友人を含め三十三名、早速昼食となる。そしてチセスグリへ、新雪を蹴ってひと汗かき、チセハウスに戻ると甘酒(北海道支部名物)が配られる。温泉に浸り、ウイスキー

第三十六回 ウェストン祭ご案内

日時 六月五日(土)、六日(日)

(1) 記念山行(徳本峠越え)
六月五日(土) 午前六時に島々宿入口、橋のたもとに集合。装備は夏山山行に準じる。悪天候の場合は中止。

(2) 碑前祭と記念講演
六日(日) 午前十時よりウェストン広場にて。
当日の講師は日本山岳会の諸先輩。

なお、ウェストン祭の参加受付は、島々宿入口、上高地バスターミナル、河童橋たもと、碑前にておこないます。

全国の各支部から参加される方は、実行委員会本部(西糸屋)へお立ち寄り下さい。

(信濃支部)

上高地山研開所

今年には雪も少なく順調に準備が進み五月一日(土)開所の運びとなりました。

今年からは永らく管理をお願いした津村ご夫妻に代わり、島田ご夫妻が皆様のお世話を致す

今年もまた上高地山研で逢いましょう!

ことになりましたので、よろしくお願い致します。

利用料につきましては据置きとします。

会員 一八〇〇円

非会員 二八〇〇円

小学生 一〇〇〇円

幼児 八〇〇円

なお、ご連絡頂ければご飯と味噌汁の準備を致しますが、おかずの用意は必ず各自でお願い致します。

利用の申し込み先は「上高地山研島田管理人」(TEL 〇六二三九五一二五三三)です。

昨年は利用者が減少しました。会員による一層の利用をお願いすると共に非会員の方々に對する積極的なPRを是非共よろしくお願ひ申し上げます。

(山研運営委員会)

山菜山行のご案内

本年の山菜山行は、日本百名山の一つ雨飾山を計画しました。四百年の歴史を持つ小谷温泉に泊まり、信州の初夏と山菜を味わいませんか。地元、信濃支部との交流

も計画しています。

期日 六月十二日(土)十三日(日)

東京から参加の方は、十一日(金)夜、新宿からバスにて出発。現地参加歓迎。

宿泊 小谷温泉「雨飾荘」

申し込み 問い合わせは事務局および集委会員有まで。

(集委会員会)

「支部懇談会」開催

日本山岳会の若い力を一堂に結集して、登山活動に、会務運営に、全国の支部が一層協力しあえるムードをつくる懇談会です。左記の要領で開催しますので、積極的に会員各位の参加を希望します。

実施日 六月十九、二十日

場所 「諏訪湖ハイツ」

会費 七五〇円(泊二食、親睦会費含む)

参加を希望される方は、各支部または事務局にて、詳細を確認して申し込んで下さい。

(総務財務委員会)

をチビリとやり出す人が出てくると、次々にリュックから色々のものが出てきて大宴会となる。午後四時三十分、名残り惜しいチセを後にバスが出ました。

札幌までの三時間は、例により賑やかな楽しいコースタイムでスキー、温泉、歌、と参加者一同大喜びで、七時三十分、札幌大通りで解散しました。

会員・家族参加者 大塚武、三浦勝幸、平野明、平野景子、佐々木喜一、新妻徹、新妻喜恵子、新妻実、柳田涼子、石井忠雅、亀井秀子、増木康郎、増木英郎、渡部盛夫、中島俊明、中島敏子、中島さつき、中島真一郎、浅利欣吉、浅利真理子、井手貢夫、渡辺正臣、井後幸太郎、井後道子、赤石喜恵子、小野肇、川越昭夫、織笠巖、河村章人、河村皆子、河村玲子、兼平治水、横田春雄。

会務報告

4月理事会

4月14日午後6時30分

本会・ルーム

出席者 渡辺、田口副会長、神崎、西村、伊丹、高木、赤松、高橋、松家、菅沢、中村、岡沢、小倉各理事、鳴原、太田各監事、大塚、佐藤、小原各評議員
(委任) 佐々会長、水野、田村、川上、大倉、河村、鈴木各理事、松丸、村木各評議員

◎報告事項

▽各委員会、月例報告(資料配布)のうち主な点、(1)自然保護委員会の委員長交代、新委員長国見利夫会員。(2)Dr・C・ハウストン氏の来日(日本登山医学研究会招待)を機会に、五月底日本会も小集会をもつ予定(総務)。

▽五月の活動予定、昭和五十七年度総会は五月十四日、私学会館において行方。

◎審議事項

▽昭和五十六年度事業報告、決算報告、財務担当理事より報告をうけ承認、なお、四月十日に鳴原、太田両監事の会計監査をうけた。▽海外遠征登山隊三隊の推薦の件が総務より提案、承認。

評議員会

3月16日夜

本会・ルーム

出席者 大塚博美、小原勝郎、佐藤テ、望月達夫、河野幾雄、折井健一、辰沼吉吉、岸田権二、山田二郎、細川沙多子、片岡博各評議員 佐々会長、渡辺、田口各副会長、神崎、西村、伊丹各常任理事
欠席 村木、松丸、朝比奈、木下、高遠、柴田、西沢、飯野、蒲生各評議員
議題 昭和五十七年度事業計画・収支予算(案)承認の件
事務局より案件説明のあと、各

評議員より若干の質疑と意見とが出て検討が行われた、本件承認。

会務報告

会の近況報告(常任理事)

各評議員より会の運営に関するいくつかの問題について意見がだされ、それぞれの提案に対して活発な意見交換がなされた。主な問題をあげると、

(1)創立八十周年(昭和六十年)をどう迎えるのか、

(2)会の活動を積極的にするため何等かの基金をつくってはどうか、

(3)会員を拡大する努力の評価、(4)JACの存在意義をどう考えるか、会活動発展の方向、といった諸点である。

評議員会

4月16日

本会・ルーム

出席者 高遠宏、望月達夫、村木潤次郎、折井健一、岸田権二、辰沼吉吉、木下是雄、細川沙多子、小原勝郎、松丸秀夫、蒲生明登、佐藤テ、片岡博、河野幾雄、各評議員、渡辺兵力副会長、西村政晃財務担当理事
委任・欠席 柴田均二、山田二郎、西沢健一、飯野亨、大塚博美、朝日奈英三各評議員、佐々会長、田口副会長
議長 松丸秀夫評議員
◎会務報告 五件(渡辺副会長)

◎審議事項

▽定款第三条による、(1)昭和五十六年度事業報告(渡辺)、(2)昭和五十六年度決算報告(西村)(3)財産目録(西村)等総会提出資料について、定款第三条により各評議員の意見をきく、審議の結果、承認。

▽監事の交代(第一四、二〇条) 鳴原監事の任期満了につき、次期監事一名の推薦を行った。会員番号四二四〇番、小倉茂輝会員が推薦された。

◎懇談事項

審議終了後、除籍会員名簿の検討、会費据置期間の予測、支部会費の扱い方、予算措置のできない支出についての扱い、基金づくり関連で賛助会員制の扱い、遭難対策関係の会としての対応等について種々懇談した。

ルーム日誌

(57年3月)

4日(木) 青懸委員会
6日(土) 指導委員会
8日(月) 理事会
12日(金) 科学委、自然保護委 共催国際山岳会会長講演会
13日(土) 山岳史懇談会
15日(月) 会員懇談会
16日(火) 評議員会、婦懸委員会
17日(水) 三水会、指導委員会
18日(木) 婦懸セミナー、青年

懇談会、会報編集委員会

23日(火) 婦懸委員会
24日(水) 図書委員会
25日(木) 自然保護委員会
26日(金) 科学研究委員会
27日(土) 新入会員オリエンテーション
30日(火) 婦懸懇親会
31日(水) フィルム委員会
今月の来室者41名
会員移動(3月)
退会
七五八九 同人ユングフラウ
七八二七 内ヶ島吉廣
八七〇一 神谷 雅行
名称変更
一一〇二 一橋大学山岳部→一橋大学 一橋山岳会

お詫び

会報四月号(42号)でお知らせしましたソ連山岳連盟との交流登山は、四月に担当者である田村俊介氏がソ連に詳細を打ち合わせに行きました所、登山場所をバミールではなく、コーカサスに変更して欲しいとのことでしたので、本年の交流登山を中止し、来年の夏に行うことに致しました。

海外連絡委員会
青年懇談会

山 443-1982・5・20 (第三種郵便物認可)

不中の郵便物は付

お知らせ

・「私の歩いたイタリアの山々」 講師 牧野文子氏

日時 六月三日(木) 18時30分より

・グルカ兵とイギリス人登山家の歓迎会

日時 六月十二日(土) 18時より

会費 千円

なお、場所はいずれもルームです

海外委員会

昭和五十七年五月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十一

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(261) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂二丁目三番六号

印刷所

株式会社 技報堂